HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義 : リヴァプールのウィリアム・ロスコーを中心に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	田村, 理
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11626号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58728
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Tadashi_Tamura_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：田村　理

主査　教　授　長谷川　貴彦
審査委員　副査　准教授　松嶌　明男
副査　准教授　村田　勝幸

学位論文題名
イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義
−リヴァプールのウィリアム・ロスコーを中心に−

本論文は、18 世後半から 19 世紀初頭にかけてイギリス各地で展開した奴隷貿易廃止運動を政治社会史的アプローチによって考察したものである。大西洋奴隷貿易史をめぐっては、歴史家エリック・ウィリアムズによって提出されたいわゆる「ウィリアムズ・テーゼ」が本格的な考察の起点をなしている。ウィリアムズによれば、ヨーロッパ、アフリカ西岸、北米カリブ海諸島を結ぶ環大西洋地域において奴隷貿易を中間航路として組み込んで発展した大西洋三角貿易が莫大な利潤をもたらし、イギリス産業革命を準備することになったのだという。しかし、ウィリアムズ理論には、あまり知られていない第二テーゼなるものが存在する。すなわち、かくも莫大な利潤をあげていた奴隷貿易を、なぜにイギリスは率先して廃止することになったのかというものである。本論文は、この近代イギリス史ないしはヨーロッパ史に関する「謎」のひとつについて、最大の奴隷貿易都市であったリヴァプールを対象として検討しようとする意欲的な試みである。

本論文は、長い研究史をもつとともに、近年急速な進展を見せているイギリス奴隷貿易廃止運動研究に関する厖大な内外の文献にくまなく目を通し、それらの批判的検討を通じて議論が構成されている。とりわけ一国史的アプローチを乗り越えるものとされる帝国史やグローバル史（空間論的転回）の手法に依りながら、大西洋世界、ヨーロッパないしはイギリス、そしてリヴァプールという重層的空間のなかで、奴隷貿易廃止運動が展開していった事実を描くことに成功している。その際、リヴァプールを中心とする地方文書館に残されていたオリジナルな史料を発掘して、それらを綿密に分析するという実証主義的姿勢が貫かれており、本論文はリヴァプール都市史としても第一級の研究として評価されるべきであると思われる。

ただ審査の過程では、本論文における研究史の把握がやや一面的であり、したがって全体の構成が図式的過ぎること、奴隷貿易という植民地主義に関連した主題を論じるにあたり論

理や表現に若干の荒削りな部分があることも指摘された。また、使われている史料の多くが書籍・小冊子・新聞などの印刷物であり手稿史料の解読という点では物足りなさを感じること、文化史的なアプローチを採ることによって多様なアクターたちの言説分析に関心が集中し背景となる社会史的実態に関する考察が不十分である点なども指摘された。だが、これらの点は、今後、研究が進展するなかで徐々に克服されていくであろうと思われるものであり、本論文の評価を全体として損なうものではないと判断された。

以上の審査結果により、本審査委員会は全員一致して、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。